



ハンドボール学生選手権における日本チームに対する各国の戦術分析

学生証番号 9JGP3212

氏名 田辺 謙吾

指導教諭 平岡 秀雄

I. 研究目的

ハンドボールにおいても相手チームがどのような戦術によって攻撃をしてくるのかを知ることが大変重要であり、戦術を知ることによって相手チームがどのような攻めのパターンで来るのかなどの特徴を把握し対処することが容易になります。

分析の方法は各チームそれぞれ異なっていますが、本研究では、第16回の学生選手権において各国のチームが日本チームに対してどのような戦術によって得点を取っているのかを分析し、各チームの特徴を明確にしようとしてきました。

II. 研究方法

(1) 研究対象

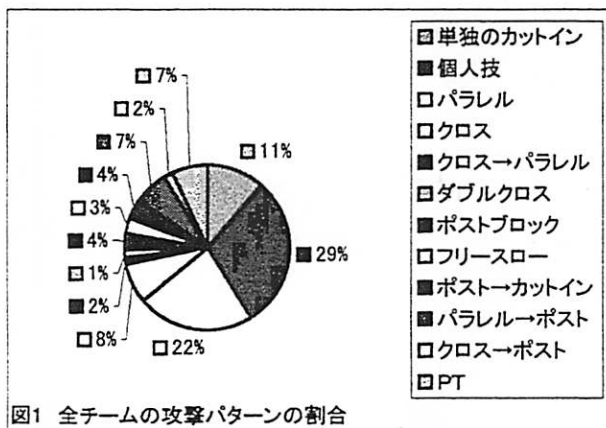
第16回世界学生選手権大会

(日本対ユーゴ・アルジェリア・ハンガリー・ルーマニア・中国)

上記の第16回の世界学生選手権大会のビデオを分析するにあたり、日本のディフェンスに対する各国の戦術を分析するためにセットオフenseのパターン、局面などのチェック項目を設けて分析した。

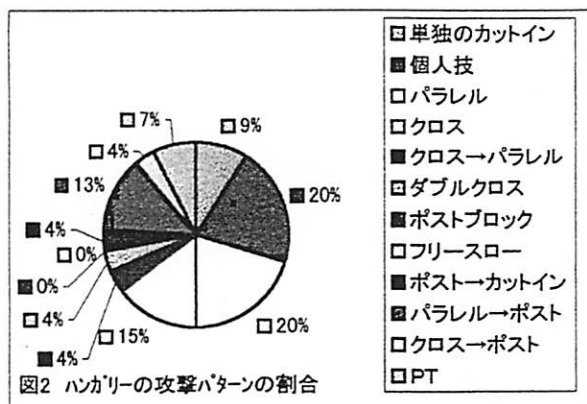
III. 結果と考察

今回の研究では、各国の戦術面を研究の対象に行ったため、シュートに至る前の時点でのパスミスやキャッチミスなどは、研究対象外として攻撃回数に含めていない。本研究ではシュートを放つに至った場合のみをセットオフenseの攻撃として分析の対象としました。



(1) 全体 (図1)

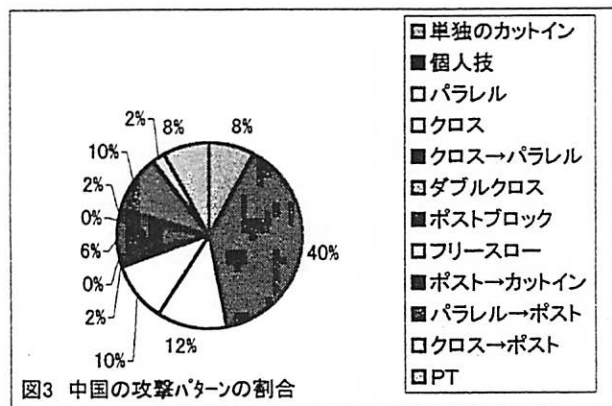
まず全体的には個人技で攻撃する割合が非常に多い。ついでパラレルプレーや単独のカットインなどが続いている。個人技による攻撃は29%と多く、対格差で劣る日本のディフェンスに対してドリブルからの個人によってディフェンスを振り切ってシュートに至ったケースが多かった。次に多かったのは、パラレルプレーからの得点であった。



(2) ハンガリー(図 2)

図2はハンガリーの攻撃パターンの割合を示したものである。ハンガリーは今回の分析の中で1番多彩な攻めのパターンを持っていた国である。図2を見てみるとパラレル(20%)やクロスプレー(15%)が多く、それに連携したパラレルからのポストやクロスからのポストパスなど他の国に比べてきわめて組織的連携による攻撃

パターンを持ったチームである事が分かった。似たような攻撃パターンを持っていたのがルーマニアであった。



(3) 中国(図 3)

中国はアルジェリアやユーゴスラビアのようにハンガリーやルーマニアとはまったく逆で、個人技が40%と攻撃パターンの大半を占めており全般的に組織的な攻撃より個人技に依存するチームのタイプと考えられる。

IV.まとめ

今回の大会を分析した結果から、各国の最多攻撃パターンは個人技によるものであった。このことは、チームプレーであるハンドボールも、その基本となる得点は個人のテクニックによるものであるところが絶大であり、選手個々の技術力向上の集約がチーム力に直結しているといえる。

今回のような戦術的な分析を事前に行っておくことにより、相手の最も得意とする攻撃パターンを積極的につぶすディフェンスを用い相手に次善の攻撃パターンを主要せざるを得ない状況を作り出すことが出来き、自分のディフェンスを優位に形成しシュート阻止など、より有利な展開でゲームを発展させることが可能であると考察できた。



ハンドボールにおける個人技術選択に関する調査

学生証番号 9JGP1113

氏名 吉田 哲郎

指導教諭 平岡 秀雄

I 研究目的

ハンドボールの攻撃では、個人技といわれる一人でのプレーとコンビネーションといわれる、二人ないしそれ以上の人数で相手ディフェンスを崩すという二通りの攻撃がある。中でも個人で発揮するプレーは、攻撃においても基本であり、チームの攻撃の特徴を左右する重要なものとなる。更に、各チームにおいて攻撃の中心となるプレーヤーの個人プレーを把握することは重要と考える。また、もしそのプレーヤーの動きの特徴をつかむことができれば、相手オフェンスの得点チャンスの減少また得点そのものを減少させることができるのではないかと考えた。

そこで本研究はハンドボールの攻撃において、個人のプレーの種類、およびプレーパターンの発現率を調査分析することにより、選手のプレーの特徴を明らかにする方法を確立しようとした。

II 研究方法

1) 調査にあたり、関東ハンドボール1部リーグに所属する10チームのうち4チームとの試合を録画した。次に東海大学と対戦した試合のビデオを再生し、ハンドボールでフローターと呼ばれるバックコートプレーヤー（センター、左45度、右45度）を分析対象とした。試合中、ポジション（攻撃位置）が変わる場合があるが、対象選手がフローターにいる場合のみとし、サイドやポストでの攻撃は分析の対象としなかった。また、ハンドボールの攻撃には速攻とセットオフェンスがあるが、今回はセットオフェンスのみの攻撃を分析対象とした。

<2002年度9月14日～10月14日 関東学生1部秋季リーグ>

2) 被験者

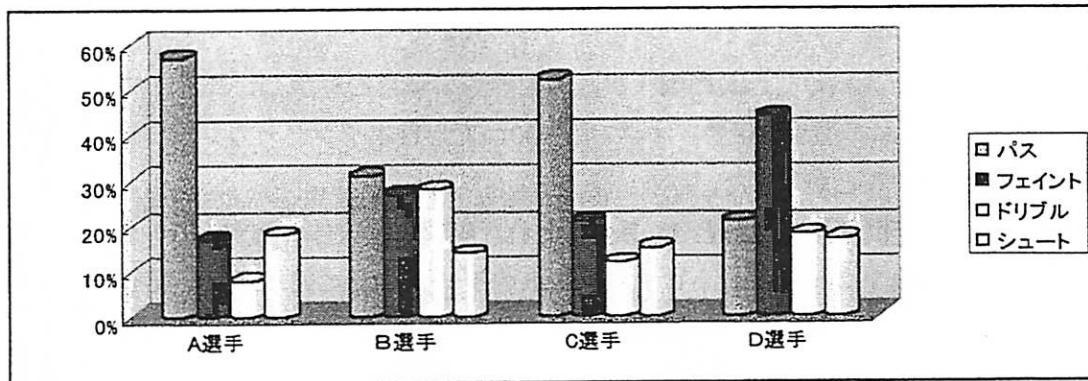
選手の特徴を分析する方法の有効性を明らかにするため、東海大学ハンドボール部員（フローター選手4名）を分析した。

3) 分析観点

ハンドボールの攻撃は、大きくパス、フェイント、ドリブル、シュートの4つに分類することができる。またそれぞれの攻撃もさらに細かく分類することができる。パスには4つのプレーパターンに分類し、ゴール方向に進んでいるか、あるいはディフェンスに対してずれながらパスをもらっているかということがとても重要で、これらの4つのプレーパターンはディフェンスを崩すためのきっかけとされる。フェイントは2つのパターンに分類し、主に使用されるワンフェイントとダブルフェイントを分析対象とする。ドリブルは3つのパターンに分類することで、ドリブルをどういう場面で使用するかと

ということがわかる。シュートは5つのプレーに分類した。シュートはハンドボールの最終局面でとても重要な場面であり、シュートに至るまでどのような過程であったかを分析するためこのようなプレーパターンに分類した。これらのプレーパターンを分類し分析することで対象選手の特徴が明らかになると考えた。

III 研究結果および考察



上図は各選手のプレーの内訳で、パス、フェイント、ドリブル、シュートの大きく四つに大別し、各プレーの発現割合を示したものである。A選手とC選手はプレー全体に対して、パスの割合(50%以上)が多い。B選手は、どのプレーも平均的な発現率(20~30%)であることがわかるが、A、C選手と比較するとフェイントの割合が高いことがわかる。D選手はプレー全体に対して、フェイント(40%以上)が多いことがわかった。このことから、パス、フェイント、ドリブル、シュートにおける発現率に差が出ており、大きくプレーの種類を分類しても各選手の特徴が明らかになり、そのことを示すことに適しているといえる。

IV まとめ

本研究は、ハンドボールにおける個人プレーの種類、プレーパターンの発現率について調査分析してきた。各選手のプレーの種類を調査分析することにより、プレーの特徴を大まかに捉えることができた。また、プレーパターンについて調査分析することにより、さらに細かい各選手の特徴を明らかにすることができた。このことより、本研究のハンドボールにおける各選手の特徴を明らかにすることにおいて適切だったといえる。

ハンドボール競技をしていく上で、個人の技術とはなくてはならないものである。それゆえ、各選手のプレーの種類、プレーパターンの発現率を調査分析することは自分を知るためにも、また他チームの選手を知るためにも十分に利のあることだと考えている。今回の調査分析はあくまでも各選手の特徴が出るかでないかを明らかにするための方法の確立であり、他チームの選手を調査分析すれば自チームの勝利となるということではない。しかし、少なくともこの分析調査により、自チームが勝利に近づくということは確かではないかと考える。